

第3章 カフカのテキスト *Kinder auf der Landstraße* における対話の分析

—繰り返しの技法—

0. はじめに

カフカ作品において提示される対話の中には、その解釈が難しいものがある。小品 *Kinder auf der Landstraße* (『国道の子供たち』) の末尾に置かれている短い対話も、その一つであろう。一見したところ、日常的な対話のように思える。ところが、その内容を理解しようとする、容易でないことに気づく。なぜ、理解するのが難しいのだろうか。本章の目的は、この作品の対話をテキスト言語学的に分析することにより、対話の理解を困難にしている要因を抽出することにある。さらに、抽出された「カフカの」な要因に基づいて日常的なドイツ語対話を考察することにより、日常的な対話を構成する通常性の一部を明らかにしたい。

1. 対話と「歪み」

1.1. カフカ作品における対話

カフカ作品には、対話を多く含むものがある。たとえば、長編の三作品 *Amerika* (『アメリカ(失踪者)』), *Der Prozeß* (『審判』), *Das Schloß* (『城』) に関する Krusche (1974) の調査によれば、テキスト全体に占める登場人物間の対話(会話)の割合が50%を超え、それぞれ50~55%, 60~65%, 70~75%を占めているという (S.52)。この三作を理解のしやすさに関して比較すると、*Das Schloß* が一番難しいと感じられるようだ (西嶋/ライネルト 1992: 84f.)。その理由の一つとしては、作品全体に占める対話の量やその果たす役割が関係している可能性がある (vgl. 三谷 1986)。すると、カフカ作品の特徴の一端は、対話に求めることができるかもしれない。筆者は、カフカ作品における「カフカのなもの (*Das Kafkaeske*)」の一部は登場人物間の対話を構成するある特殊な言語学的構造に還元できると考えている。それを検証するために、これまで *Die Bäume* (『木々』) と *Von den Gleich-*

nissen (『寓意について』) の二作品の分析を試みた(西嶋 1990, 2000および Nishijima 2000 [本書第1章と第2章] を参照)。その結果, 「カフカのなもの」の一部を構成すると考えられるある種の技法が確認できた。その技法は, 端的に「歪み」と特徴づけることができる。

1.2. 「歪み」の構造

対話というテキストは, 意味論(事態提示)レベルとテキスト内言語相互行為レベルという二つのレベルで分析できる。¹⁾ 筆者が提出した「歪み」とは, 両レベル間に見られる結束性(Kohärenz)の度合いの不均衡と規定できる。本節では, この「歪み」を, 対話という明示的な構造はもっていないが, 対話的特徴をもつテキスト *Die Bäume* を例に説明しよう(vgl. 西嶋 1990)。参考のためにテキストの日本語訳を引用する。²⁾ なお, 説明をわかりやすくするために, テキストには番号を付してある:

(1)Denn wir sind wie Baumstämme im Schnee. (2)Scheinbar liegen sie glatt auf, (3)und mit kleinem Anstoß sollte man sie wegschieben können. (4)Nein, das kann man nicht, (5)denn sie sind fest mit dem Boden verbunden. (6)Aber sieh, sogar das ist nur scheinbar.

このテキストでは, 否定が二度繰り返される。すなわち, (4)と(6)は, それぞれ前文を否定している。この否定の繰り返しによって意味論レベルでは整合的な意味世界を構築しえない。その意味で結束性が低いと言える。しかし, テキスト内言語相互行為レベルでは, (4)と(6)などのように場面性の高い表現が使われ, しかも漸次的にその程度が強められているので, 論弁性(Argumentativität)という観点からすると, きわめて高い結束性をもっていることがわかる。³⁾ そのため, 意味論レベルとテキスト内言語相互行為レベルの間で結束性の程度に差が生じている。このようなレベル間の不均衡を筆者は「歪み」と呼ぶ。このような特徴は, *Von den Gleichnissen* という作品でも同様に認められる。ただし, 両作品には, たしかに基本的な構造としてこの「歪み」が共通して見られるが, 細かな技法に関しては異なっている

(西嶋 2000)。本章では、*Kinder auf der Landstraße* を上記二つのレベルで分析し、同様の「歪み」が認められるかどうかを検証した上で、さらに、この作品で用いられている他の技法についても明らかにしたい。

1.3. テキスト理解の難しさ

理解や解釈が難しいと言われている作品の一つとして、小品集 *Die Betrachtung* (『観察』) に収められている小品 *Kinder auf der Landstraße* を挙げるができる。このテキストの難しさに関する議論は、たとえば Glinz (1978) に見られる。Glinz は、自分の大学での演習で学生たちにこの作品を読ませ、感想を書かせた。そのうち、とくに作品の末尾におかれている対話について言及しているものが二例あるので、それを以下に引用しておく。

例 1 : „Der Schluß (Narren) ist zunächst völlig unverständlich.“
(S. 53)

例 2 : „Die Geschichte wird klarer, obwohl der Schlußdialog für mich unverständlich bleibt und sich nicht in das Ganze einbauen läßt.“ (S. 54)

上例が指摘しているように、テキスト末に置かれた対話のわかりにくさの要因は、少なくとも二点ある。一つは、例 1 に示されているように、対話それ自体が理解しにくいという点である。他の一つは、例 2 で述べられているように、テキスト末の対話とそれ以前のテキストとを適切に関連づけできないという点だ。本章はとくに対話の構造自体に関心があるので、第一の要因を中心に分析したい。

2. *Kinder auf der Landstraße* のテキスト分析

2.1. テキストの提示

Kinder auf der Landstraße のテキスト末の対話部分を含む最後の段落を引用する。⁴⁾ 対話部分には、後の議論をわかりやすくするために番号を付し

である：

Es war schon Zeit. Ich küßte den, der bei mir stand, reichte den drei Nächsten nur so die Hände, begann den Weg zurückzulaufen, keiner rief mich. Bei der ersten Kreuzung, wo sie mich nicht mehr sehen konnten, bog ich ein und lief auf Feldwegen wieder in den Wald. Ich strebte zu der Stadt im Süden hin, von der es in unserem Dorfe hieß :

- (1) „Dort sind Leute! Denkt Euch, die schlafen nicht ! “
- (2) „Und warum denn nicht ? “
- (3) „Weil sie nicht müde werden. “
- (4) „Und warum denn nicht ? “
- (5) „Weil sie Narren sind. “
- (6) „Werden denn Narren nicht müde ? “
- (7) „Wie könnten Narren müde werden ! “ (DL, S. 13-14)

2.2. 意味論レベルの分析

テキスト末の対話は、南部の町に関して村でうわさされている話として引用される。まず、意味論レベルに関して簡単に分析してみよう。

発話(1)で、町の人たちがうわさの対象として取り上げられ、その人たちは「眠らない」(不定句として取り出すと **„nicht schlafen“**。以下同様)と主張される。発話(2)は、連中がなぜ眠らないのか、その理由を尋ねる。発話(3)は、その理由として、「疲れ(眠くなら)ない」(**„nicht müde werden“**)からだと返答する。⁵⁾ 発話(4)では、連中がなぜ疲れ(眠くなら)ないのか、その理由を尋ねる。発話(5)は、その理由として、「ばかだ」(**„Narren sein“**)からという答えがなされる。発話(6)で、「ばか」と「疲れ(眠くなら)ない」との関係がただされる。発話(7)で、ばかは疲れる(眠くなる)はずがないと断定され、会話が強制的に終了となる。

さて、この対話では何が問題にされているのか。あるいは、その意味上の帰結は何か。最後の修辞疑問文による断定的表現 **„Wie könnten Narren**

müde werden!“ から、„Narren“ の特性として „Narren werden nicht müde“ [ばかは疲れ（眠くなら）ない] という命題が引き出せる。⁶⁾ さしあたりこの命題をこの対話の帰結と捉えておくことにしよう。

ところで、この対話のテーマ展開の流れをたどると、(6)の発話で、テキスト表層上のテーマに転換が起こっていることに気づく。発話(1)～(5)までは、南部の町の「人たち (Leute)」がテーマとして叙述されていたのが、(6)と(7)では、(5)でテーマとして扱われていた「ばか (Narren)」が新たなテーマとして導入され、その属性が叙述されている。すなわち、当初テーマとして導入された南部の町の「人たち」に関する叙述が、「ばか」をテーマとする叙述に移行し、しかもその「ばか」の属性が断定的に提示されて終わっている。この短い対話の焦点が二つに分散してしまっている。このように、途中で生じたテーマ転換により、テーマが一貫していない点が注目される。⁷⁾ では、なぜここでテーマに変化が生じたのか、またテーマ転換の意味はどこにあるのかなどといった疑問が生じる。こういった問題については、作品構成上の技法との関連で後述する。

2.3. テキスト内言語相互行為レベルの分析

つぎに、テキスト内言語相互行為の観点からこの対話を分析すると、問いと答えという、いわゆる隣接対 (Paarsequenz, adjacency pair) に基づく強固な発話行為連鎖が見られる。その意味でこの対話はきわめて結束性の高い構造をもっている。とくにこの作品の疑問詞 „Warum“ による問いかけと接続詞 „Weil“ による理由づけの対は、論弁性という点において言語相互行為としてのまとまりの度合いが極めて高い。⁸⁾ また、最後の疑問文(6)に対する応答(7)には、修辞法による前言に対する断定的応答という点でより強力な結束性が認められる。たしかに、„Warum“ を用いた疑問と „Weil“ による応答などのようにその定型表現の繰り返しによって通常性が作り出されている。しかし、最終的に(7)の断定的表現でそれまでのやりとりすべてが破棄されてしまうかのようだ (テキスト末尾での同様の機能は *Die Bäume* にも認められる。西嶋 (1990) を参照)。

2.4. 基本構造としての「歪み」

したがって、上記二つのレベルの間で、結束性の度合いに違いがあることがわかる。⁹⁾ たしかに意味論レベルではテーマの転換が起こっているため、内容が拡散し集束点が見出しにくい。しかし、対話を言語行為の形式的な連鎖として捉えるならば、この対話は、問いと答えという強力な隣接対からなる。その意味で、結束性の高い構造をもつ。したがって、対話としての形式的協調は、十分確保されている。¹⁰⁾ このように、意味論レベルとテキスト内言語相互行為レベルという二つのレベルにおいて結束性の度合いに違いがあるので、*Kinder auf der Landstraße* の末尾に置かれた対話についても、*Die Bäume* と *Von den Gleichnissen* と同様に形式的な構造として「歪み」という特徴が認められる。以下では、それ以外に指摘できるこのテキストの特徴を挙げることにする。

3. テキストの特徴

3.1. 同一言語行為の繰り返し

この作品の対話に見られる基本的な構造上の特徴としては、すでに述べたように、問いと答えという隣接対に基づく発話行為連鎖が指摘できる。とくに「Warum」による疑問と「Weil」による答えの連鎖が目につく。まず(2)で前言(1)の理由を問い、「Weil」を用いてその答えが提示される。つぎに、(4)で同様に「Warum」を用いて前言(3)に含まれる命題内容の理由が問われ、(5)で同じく「Weil」を使ってその答えが提示される。このように、「Warum」による質問 → 「Weil」による応答という同一形式のやり取りが二度続くので、「Weil」文では、一見同一の理由提示行為が行なわれているように見える。しかし、実際は異なる言語行為を実現しているのである。これを、Heringer (1977) にもとづいて説明してみよう。

Heringer は、「Warum-Spiel」という実験を第三学年の児童たちに対して行ない、「Warum」と「Weil」との関係を調査した(Heringer 1977: 275-295)。その結果、「Weil」で提示される言語行為について二つの行為が区別できることを明らかにしている。その二つとは、「Erklären」と「Begründen」である。すなわち、自然法則などによる因果関係が認められる場合と主観的

な理由づけに関わる場合が区別されている。その二つに対応する例を挙げよう (Heringer 1977 : 275-276) :

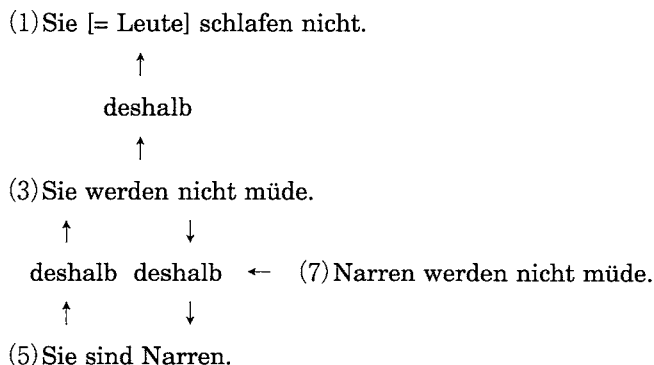
- (a) Die Flasche ist zersprungen, weil das Wasser gefroren ist.
- (b) Ich habe Phirsische weggeworfen, weil ich keinen Hunger hatte.

(a)における前半の主文と接続詞 *weil* に導かれる副文との関係にはある法則性が認められるので、*weil* 文があらわす行為は、「Erklären」となる。これは、「wenn-dann」の条件構文で書きかえることができる。ところが、(b)のほうは、主文と *weil* 文との間に法則性が想定できない。むしろ、個人的な事情にもとづいているので、*weil* 文の行為は、「Begründen」となる。このように、理由提示表現として同一形式の *weil* 文が用いられている場合でも、それが提示する言語行為に違いがあることがわかる。この区別が *Kinder auf der Landstraße* の対話を理解するのに役立つ。この観点から上記テキストを見直してみよう。読みやすさのために対話部分のみを再掲する：

- (1) „Dort sind Leute! Denkt Euch, die schlafen nicht !“
- (2) „Und warum denn nicht ?“
- (3) „Weil sie nicht müde werden.“
- (4) „Und warum denn nicht ?“
- (5) „Weil sie Narren sind.“
- (6) „Werden denn Narren nicht müde ?“
- (7) „Wie könnten Narren müde werden !“

発話(3)と(5)で二つの理由提示行為がなされているが、そこには違いが認められ、単純な理由行為の繰り返しではないことがわかる。(2)と(3)の関係では、「müde werden」は日常的には「schlafen」の前提ないし必要条件を構成するので、そこには自然な因果関係が見て取れる。すなわち、(1)と(2)と(3)から得られる「sie schlafen nicht, weil sie nicht müde werden」という表現は、Heringer (1977 : 276) にしたがって書き換えれば「wenn sie nicht

müde werden, dann schlafen sie nicht“ となり、自然な因果関係が確認できる。その意味で、(3)の理由では、„Erklären“ という行為がなされていると言える。ところが、(4)と(5)については、„nicht müde werden“ と „Narren“ との間に、自然な因果関係は見られない。すなわち、(3)と(4)と(5)を基につくられる „sie werden nicht müde, weil sie Narren sind“ という表現は、*wenn-dann* 構文で書き換えるとなると、„wenn sie Narren sind, dann werden sie nicht müde“ となるが、そこには、自然で必然的な因果関係が見出せない。つまり、(5)の理由提示では、主観的な判断に基づいた恣意的な理由づけしか認められないので、„Begründen“ という行為がなされていることになる。そこで示される „nicht müde werden“ と „Narren“ との関係づけが恣意的で一般性をもっていないので、それをただすために次の(6)で両者の関係を立ち入って尋ねることになるのだろう。その結果、その答えとして(7)で両者の関係が断定的に提示されることになる。この断定により、(3)と(5)は循環するよう関係づけられてしまう。その関係を図示してみよう。(括弧内の数字は、テキスト内対話における発話に対応している。なお、図は Heringer (1977 : 291) のそれを参考に行っている)。



3.2. テーマ転換

すでに指摘したように、この対話では、(5)と(6)の間でテーマが変化して

いる。このテーマ転換は、(5)のレーマの述語部分に名詞 „Narren“ が用いられていることと関係しているように思われる。この対話テキストの(1)-(3)-(5)に関して言えば、そのテーマは、„Leute“ - „die“ - „sie“ であり、すべて „Leute“ を指示している。他方、その対応するレーマは、それぞれ „nicht schlafen“ - „nicht müde werden“ - „Narren sein“ であり、文法カテゴリーが「否定詞+動詞」—「否定詞+形容詞+動詞」—「名詞+sein 動詞」というように異なっていることに気づく。(5)で名詞 „Narren“ が用いられているので、その名詞を取り挙げ、それに焦点をあてることによって、テーマが容易に変化したと考えられる。

同じような形式でテーマ転換がおきているカフカの他のテキストに、上節で取り挙げた *Die Bäume* がある(上節1.2.を参照)。このテキストの第一文では、比喩として „wir“ と „Baumstämme im Schnee“ が関係づけられるが、後続する文では、比喩の説明として導入された „Baumstämme im Schnee“ が新たなテーマとして展開され、そのままテキストが終わる。このように、ある文の述語部分に名詞が含まれていると、テーマの移動が容易に行なわれる。その移動は、しばしば巧妙になされるので、気づきにくいのである。

4. 結語

Kinder auf der Landstraße の末尾に置かれた対話においても、*Die Bäume* と *Von den Gleichnissen* で見られた「歪み」が確認された。解釈が難しいとされるカフカ作品の対話には、この「歪み」が共通して存在している可能性がある。事実、他のテキストでも同様の「歪み」が確認されている(vgl. 西嶋 2001 [本書第4章])。この「歪み」がカフカ作品においてどの程度の一般性をもちうるのかは、他の作品の分析を行なうことによって検証してゆく必要があろう。

また、*Kinder auf der Landstraße* を分析することで、他の特徴として同一言語行為の繰り返しとテーマ転換も明らかにされた。同一言語行為の繰り返しについては、*Kinder auf der Landstraße* では、疑問詞 *warum* による疑問行為と接続詞 *weil* による理由提示行為というやり取りが二度繰り返されている。このような疑問行為の繰り返しは、日常的な対話でも頻繁に観察

されるものである。ところが、たしかに繰り返されてはいるが、単純な繰り返しではない。理由提示行為の機能が、既述のように異なっているのだ。この繰り返しにともなう言語行為の巧妙なずらし（スライド）が、テーマ転換を引き起こす要因になっていると考えられる。ところで、テーマ転換は、一般的には、A というテーマから B というテーマへ焦点をスライドさせることと理解されるが、このようなスライドは、テーマ間だけでなく、二つの異なるレベル（次元）間においても生じている。たとえば *Die Bäume* では、主観関連世界と客観関連世界という異なる世界に対して否定行為が二度繰り返されている。すなわち、同一言語行為が、異なる次元間をスライドしてなされているわけである。とすると、テーマ転換と次元の転換は焦点のズラシという同じ技法の異なる実現形態として理解できそうである。このような特徴がカフカの他の作品にも認められるかどうかに関する調査も、今後の課題となろう。

さらに、カフカはどのような理由からテキスト末にこのように理解の困難な対話を配置したのであろうか。Glinz の学生による指摘（例 2）と関連するが、このテキスト末の対話とその前にあるテキストとはどのような関係があるのか。また、テキスト末に置かれた対話の難しさと、その対話の末尾でそれまでのやり取りを破棄してしまうかのような機能との間には何らかの関係があるのか。こういった語りと対話との関連の問題についても今後の課題とする。

注

- 1) 意味論レベルでは、テキストによって提示される意味世界を対象とする。相互行為レベルでは、会話参与者どうしの言語行動のやり取りに注目する。テキスト分析の際のレベルの区分については、西嶋（1990）を参照のこと。
- 2) 引用は校訂版（DL）による。S.33。
- 3) ある言語表現が、ある特定の発話行為と慣習的に結びつき、それが発せられると特定の場面を想起させてしまう場合、そのような表現をとくに場面性が高いという。ある言語相互行為において、議論の際に使用される特定の表現形式が用いられ、実際に議論という形式が認められる場合、論弁性があるという。論弁性に関する詳しい説明は、Marui（1995）を参照のこと。
- 4) DL, S.13-14。

参考のために対話の部分の日本語訳と英語訳を掲げておく：

「あそこには、眠らないひとたちが住んでいるんだって！」

「どうして眠らないんだろう？」

「それはかれらが疲れないからさ。」

「それじゃ、どうして疲れないんだろう？」

「それはかれらがばかだからさ。」

「ばかは疲れないの？」

「ばかが疲れるはずないじゃないか！」

(円子修平訳「観察」. In: マックス・ブロー特編『決定版カフカ全集1』. 新潮社, 1980, S. 19-20.)

“There you’ll find queer folk! Just think, they never sleep!”

“And why not?”

“Because they never get tired.”

“And why not?”

“Because they’re fools.”

“Don’t fools get tired?”

“How could fools get tired!”

(Translated by Willa and Edwin Muir. *Franz Kafka: The Collected Short Stories of Franz Kafka*. London etc.: Penguin Books, 1988, S. 382.)

- 5) „nicht müde werden“ の „müde“ とはどのような意味か。ドイツ語辞典『ドゥーデン・ドイツ語ユニヴァーサル辞典』(DUW)には、つぎのように記されている (S. 1040)。

(a) in einer Verfassung, einem Zustand, der Schlaf erfordert; nach Schlaf verlangend

(b) [nach Anstrengung, übermäßiger Beanspruchung o.Ä.] erschöpft, ohne Kraft od. Schwung [etw. zu tun]

日本語訳では、(b) の意味で理解しているようだ。しかし、テキスト内の対話では、„schlafen“ との関連で „nicht müde werden“ が現われる。ということは、(a) である可能性もあるわけだ。そもそも (a) と (b) は不可分の関係にあるのではないだろうか。(b) は、その結果として (a) という状態になるからである。エーバーハルトの『同義語辞典』(Eberhard 1910) には、„müde“ を他の類義語と区別するために、つぎのように説明され、両義的であることがわかる (S. 774)：

Müde (von mühen, eig. einer, der sich abgemüht hat) ist, wer durch anhaltende Anstrengung abgespannt ist und sich nach Erneuerung seiner Kraft durch Ruhe, besonders durch Schlaf sehnt

両義的なので、以下では、二つの訳語を併記する。

- 6) 日本語にも類似した内容の表現があるのは興味深い。たとえば、江戸狂歌の中に、つぎのようなものがある。

世の中に寝る程楽は無きものを

知らぬうつけが起きて働く（狂言・杭か人か）

《江戸狂歌選・巻之四》<http://www.j.u-tokyo.ac.jp/%7Esota/humor/kyoka4.html> より引用)

この狂歌は、現代では一般に「寝るより楽はなかりけり、浮世のばかは起きて働く」などといった理解しやすい表現となって流布している。

- 7) Hess-Lüttich (1979) によると、テーマのずれが登場人物間のコミュニケーションの失敗につながり、それがカフカ作品の特徴の一つとなっているという (S.365)。
- 8) テクストのまとまりを説明する概念には二つある。結束構造 (Kohäsion) と結束性 (Kohärenz) である。一般に、前者は文法的・形式的なつながりを、後者は意味レベルでのまとまりを表わす。しかし、言語行為連鎖をどちらでとらえるべきかについては、明確には決まっていない。本章では、意味レベルと言語相互行為レベルにおけるまとまりの度合いに関する不均衡を問題にしているので、言語行為のまとまりについても、意味的まとまりと同様に、結束性という概念を使用する。なお、疑問文は、そのコミュニケーション上の機能の一つとして、対話相手に関する積極的な関心 (Involvement) を示すためにも使われることがある。この点については、Tannen (1989) を参照。
- 9) 結束性の度合いのアンバランスに関するより詳細な議論は、西嶋 (2000) を参照。
- 10) ここでは、Grice が提出した「協調」とは異なる概念が問題にされている。Grice 流の協調概念は、もっぱら効率的な情報の伝達に関わるものであるが (Grice 1975), ここでいう形式的協調とは、相互行為自体を成立させる協調である。そのような概念についての詳細は、Ehlich (1987) および丸井 (1992) を参照のこと。

使用テキスト

- [全集1] マックス・ブロート編『決定版カフカ全集1』(円子 修平訳) 新潮社, 1980.
- [DL] Franz Kafka: *Drucke zu Lebzeiten*. Hgg. von W. Kittler, H.-G. Koch und G. Neumann. Kritische Ausgabe, Frankfurt/M.: Fischer Taschenbuch Verlag, 2004.

参考文献

- DUW : *Duden Deutsches Universalwörterbuch A-Z*. Hrsg. u. bearb. vom Wissenschaftlichen Rat und den Mitarbeitern der Dudenredaktion. 3., völlig neu bearb. u. erw. Aufl., Mannheim usw.: Duden Verlag, 1996.
- Eberhard, J.A.: *Synonymisches Handwörterbuch der deutschen Sprache*. 17. Aufl., durchgangig umgearbeitet, vermehrt und verbessert von Prof. Dr. O. Lyon.

- Leipzig: Th. Grieben's Verlag, 1910 (Reprinted, Tokyo: Sanshusha, 1983).
- Ehlich, K.: „Kooperation und sprachliches Handeln“. In: F. Liedtke / R. Keller (Hgg.): *Kommunikation und Kooperation*. Tübingen: Niemeyer, 1987, 19–32.
- Glinz, H.: *Textanalyse und Verstehentheorie II*. Wiesbaden: Athenaion, 1978.
- Grice, H.P.: „Logic and Conversation“. In: P. Cole / J. L. Morgan (eds.): *Speech Acts. Syntax and Semantics*. Vol. 3, New York: Academic Press, 1975, 41–58.
- Heringer, H.-J. et al.: *Einführung in die Praktische Semantik*. Heidelberg: Quelle & Meyer, 1977.
- Hess-Lüttich, E.W.B.: „Kafkaeske Konversation. Ein Versuch, K.s Misverstehen zu verstehen“. In: W. Vandeweghe / M. v. d. Velde (Hgg.): *Bedeutung, Sprechakte und Texte*. Akten des 13. Linguistischen Kolloquiums, Gent 1978, Band 2, Tübingen: Niemeyer, 1979, 362–370.
- Krusche, D.: *Kafka und Kafka-Deutung*. München: C. Hanser, 1974.
- 丸井一郎「談話の相互行為的基盤と『協調』の概念」, 『ドイツ文学』第88号, 1992, 89–100.
- Marui, I.: „Argumentieren, Gesprächsorganisation und Interaktionsprinzipien — Japanisch und Deutsch im Kontrast —“. In: *Deutsche Sprache* Heft 4, 1995, 352–373.
- 三谷研爾「カフカの『城』における登場人物の発話の機能」, 阪神ドイツ文学会『ドイツ文学論攷』第28号, 1986, 69–87.
- 西嶋義憲「カフカのテキスト *Die Bäume* を理解するために — テキストの多層性について —」, 『かいりす』(『かいりす』の会) 第28号, 1990, 31–44 (改訂ドイツ語版 „Zum Verstehen von Franz Kafkas Stück *Die Bäume* — Ein textlinguistischer Ansatz zur Vielschichtigkeit des Stücks —“, 『金沢大学文学部論集』第20号, 2000, 175–195. [本書第1章])
- ———「カフカ作品における対話の「歪み」 — *Von den Gleichnissen* のテキスト言語学的分析 —」, 日本独文学会中国四国支部『ドイツ文学論集』第33号, 2000, 1–10. [本書第2章]
- ———「カフカ作品における次元の転換 — ある「断片」を例にして —」, 『金沢大学文学部論集』第21号, 2001, 81–93. [本書第4章]
- 西嶋義憲／ルードルフ・ライネルト「発話行為理論の文学研究への応用の試み — *Kafka* の作品を例にして —」, 日本独文学会中国四国支部『ドイツ文学論集』第25号, 1992, 83–90.
- Tannen, D.: *Talking voices. Repetition, dialogues, and imagery in conversational discourse*. Cambridge: Cambridge UP, 1989.